

---

# 夏

ヘタレWRITER

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏

### 【ZINE】

N1251F

### 【作者名】

ヘタレWRITER

### 【あらすじ】

とある夏、夏休み最終日に起った不思議な物語誰もいない空間で、少年少女はそれぞれどう過ごすのか…

## プロローグ（前書き）

この作品は「ハイクション」と思こますか？　だったらセガとハイクシ  
ョンじゃつ

## プロローグ

蝉の声がする

…それは夏の幕開け

賑やかなアブラゼミの恋の歌

…それは夏真っ盛り

騒がしいミンミンゼミのコンサート

…それは一日の終わり

悲しい音色のヒグラシのクラシック

…それは夏の終わり

淋しい声のツクツクホウシの祭り囃子

蝉の声が 聞こえる…

蝉の声が聞こえる

なぜか何も見えない

意識が遠退き、また戻る

でもただ蝉の声が聞こえるだけ

ここはどこだろうか なぜ人の気配が無いのだろう

ふと目が覚めた

そこには鬱蒼とした木々が広がっていて、私を混乱させ、途方に暮れさせた

私は確か自分の家で、自分の部屋で、夏休み最後の夜を過ごしたはずだ

なぜやつてくるはずの一学期が、こんな森林に変わるのがどうひだが蝉の声は知っている蝉の声で、ここは自分の国であることに少し安堵した  
早くここがどこかを知りたい

いや、ここから一刻も早く出て帰りたい

何のあてもない森林のなかで、私は足を踏み出し、突き進んだ

その背後から足音が聞こえたのに、私は気付かなかつた

## プロローグ2

蝉の声が私を呼んでこるよ'うで

残酷な程の暑さから逃げたいようで

私は鬱蒼と茂る木々に導かれるよ'うに奥へと進んでい

怖いという感情はあつた

でも私は、人の気配無いこの中で、一番身近なセミたちを求めていた

いや、声を… 韻を求めて進んで行く

ミンミンゼミがコンサートをしてこる ああ、まだ耳聞じやない

か、時間はある

でも一日でこの島から出られる確証はない ああ、休んでいる暇

はないんだ

…なぜ声を追い掛ける?

あてもない ただ現実を受け入れ切れていないのであつか この  
んな環境に放り出されて、こんな世界に迷い込んで、でも身近な蝉  
の声はして…

それを追い掛けたらまた元の世界に帰れるのだろうか

ああ、帰りたい この世界から抜け出して、日常の生活で日々を  
送るんだ

そしてこの蝉の声を、こんな気味悪い木々の中じゃなくて、私のお  
気に入りの部屋の、お気に入りの机で、勉強に励んだり歌を聞いた  
りしてその合間にこの演奏を聞く それが日常なんだ

歩いていたはずの私の歩幅はだんだんと大きくなり、今ではもう走  
つていた

走つても走つても走つても蝉の声はあちこちに響いてこる まわり  
は木々で視界が多い少くされている  
見えるのは木と日光と土だけ…

私はどっちへいったらいいの?  
そう思った瞬間、目眩がした

取り乱し、直そうと思つて無理に顔を持ち上げてもどんどん視野が狭くなり、頭が重くなつていき、その場に倒れこんだ

倒れこんだ瞬間、ヒグラシの声を聞いた気がした

ああ、もう夕方なんだ：

## プロローグ③

ニイニイイゼミとこづ蝉がいた  
エゾゼミという蝉がいた  
クマゼミという蝉がいた

今まで知らなかつた蝉

もちろん本で見ただけだが、道の種を知つたときには胸が躍ること  
を知つた

じゃあいま鳴いている蝉は？

…アブラゼミだ

どこにでもいる至つて平凡な蝉

クマゼミは関西の方にしかいないらしい  
エゾゼミは北の方にしかいないらしい

ニイニイゼミは山奥にいるらしい

みんなこの都会では見かけない蝉ばかり

知らなくても変わらなかつた 私はそう思った

いまでもそう思つ

だから、いま高校で習つてるものにも知らなくても変わらないもの  
もある

だから習つてもしかたが無いのではないか  
いつか両親に聞いたことがある  
だが、それは違うといわれた  
クラスのみんなは賛成する  
でも大人は反対する  
わからないなあ…

ヒグラシの声がうるさくなつた  
まだ夕方なのだろうか

頭にやわらかい感触がある

頭でも強打して瀕死なのかと思ったが、そうでもないらしい  
よく考えると、私は俯せに倒れたはずだ

だがいま、感覚からして私は仰向けになつていて  
背中にもやわらかい感触

お腹のうえにも何かがある

…これは…布団だ

よつやく目を明けられた

私はベッドの上で寝ていた

そう、私は帰つてこれたようだ

うれしかつた

私は私の部屋に帰つてこれたんだ

あの鬱蒼とした森林から脱出できたんだ

窓の外からヒグラシの鳴き声

森林の中じゃなく、自分の部屋からヒグラシのコンサートを闻ける

そう思い、窓の鍵を開ける

近くに日めくり式のカレンダーがあつた

日付は…

七月二十日だった

## 一章之巻（前書き）

気がつくとそこには何もなくて　ただ広大な自然が広がつてて…

今年も夏休みが無駄に過ぎていった  
なぜ無駄に過ぎていったのか

わかっている、自分が導いたことなのだ　一日一日を大切にすご  
そう、そう思っていたはずなのに、俺は結局そうしないのだ  
明日やればいい

そんな日が何日も続いた

やつと宿題が終わつたと思つたらもう最終日だつた  
夏休みが始まつて以来、毎日が宿題から来る不安があつた　でも  
宿題が終わつたいま、俺には不安がない  
解放されたのだ

だが、残された時間は数時間程度

それしか時間が無いなんて、自分が導いたことなのにこの上ない苦  
しみに思えてしまう　時間がほしい、ただ気ままに過ごせる時間  
が、ただ自由に過ごせる時間が…

一心に求めた

神でも天でもなんでもいい　だけれども、耳に響いてくるのは神や  
天の救いの声でなく、ただただ蝉の合唱が続くばかり  
それは流れゆく時間が経過していることをゆつくりと、そして残酷  
なほどたんたんと、メロディにしているだけたつた  
こんな時に限つて、誰からも誘いの連絡が来ない  
宿題があるからなのだろうか

ヒグラシが鳴き終わる

もう夜になるのだ…

夜になれば、もう行動は限られてしまう  
こんな中坊を夜中に簡単に外出させる親もなかなかいないし、そん  
な時間に呼ぶ友達もない

もう俺は、飯を食つて、風呂に入つて、歯を磨いて寝るだけなのだ  
明日日が覚めたときにはもう夏休みは終わつて、休み前の生活が訪  
れるんだ

そう思つた

だから  
……

目が覚めたとき

目の前に広がつてゐるのがいつそいつとした森林で、蝉の声しかしな  
い場所だつたのに驚いた  
そして

うれしかつた

そこは絵に描いたような島だった  
海岸には砂浜が広がり、すぐ奥にはうつそうとしたジャングルのよ  
うな森林が広がり、中央には少し山になつていて  
まわりは海で囲まれているようだ

全貌を知るためにまだ把握しきれていないが広がる大自然とまつ  
たく感じられない人の気配

それらは夏休み最終日を終えようととして憂鬱氣味になつていた俺に  
氣力を与えてくれた　こんな大自然のなかに俺はいるのだという  
実感が力をくれたのだ

森林の奥から聞こえてくるセミたちの合唱、あのセミはなにゼミだ  
つけ？

森林の奥から聞こえる鳥の声、あの声は何ていう鳥だ？  
耳に入つてくる数々の声を聞いては自分に問い合わせる  
ほとんどわからない

ただひとつだけ、懐かしい声がした

ミー・ン・ン・ン・ン・ン・ン…

ミン・ン・ン・ゼミだった

その騒がしい声を耳にしながら、俺は眠りに就いた  
気が薄れていく中、俺はこう思った

この島で一生暮らしたい

まだ太陽は昇り切つていなかつた  
いつのまにか俺は眠つてしまつたらしく記憶が途切れた

目が覚めたら室内だつた  
そこは暖かいベッド上で  
そこには一学期が待つていて  
日当たりの悪い部屋で目覚める  
すべてが夢で

わけのわからない島にいたことはすべて夢であつて  
その世界から抜け出したことを後悔しつつ中学への登校をはじめる  
いつものような生活が訪れて、ああ、こんな生活もいいなあと  
思いながら日常を受け入れる

そんな思いがあつたのかもしれない  
一瞬、目の前の光景を受け入れがたかつた  
さつきまで受け入れていたこの世界  
なぜもとの世界が恋しくなったのだろう  
複雑な気持ちのなか、俺は生まれて初めて、一人で島の海岸で朝を迎えた  
海岸で迎えた朝は、潮風に吹かれて迎えた  
俺はいつ帰れるのだろうか…

波の音が聞こえる  
森林が騒めく音が聞こえる

鳥はまだ寝ているようで泣き声は聞こえない  
それに対し案外セミはもう鳴いていた

ヒグラシが鳴いている

夕方を思わせるイメージだったが、案外早朝にも鳴くのだ  
太陽はまだ目で見れるぐらい昇つていなし  
まだ薄暗さが残っている

どうやらまだ六時にはなっていない

ふとそう思った

体内時

計という奴だろうか、直感で思った  
非日常的な環境に置かれても人は習慣を忘れないというがそういうの  
だろう

自分の習慣がなにかどことなく大きなものなのだと初めて感じた  
夏休み中だつたら午後近くまで寝ているのだが、こんな状況下では  
そんなに悠長に寝ていられなかつた  
なにかしなくては

直観的にそう思った

よく考えれば食料も何もないのだ

なぜ、どのようにここに連れてこられたかさえ知らないのだから  
それとも自分の意志できたのか、無意識のうちに…  
いや、わからない この状況下では判断できない  
確かに夏休みの過ごし方に後悔し、夏休みの終わりを否定した  
だがそれだけでこんな場所に訪れられるわけがない  
また、誰かが連れて來たていう気配も痕跡もない  
いつたいどうやつて俺はこんなところに來たのだろう  
しばらく考えたあと、俺は何となく森のなかに入り、食べられるも  
のを探した

しかし、そうこれといった食物らしいものはそうタイミングよく見つからない

それらしいものを見つけても、食べれるという保障がない ムとかなら一か八かで試すものだが、現実はそうはいかない

一回きりなのだ

一回毒にあたつて運が悪ければそのままこの島ビーチかこの世から脱出してしまう

命懸けの運試し

人類の何万年にわたる経験がこんなにも偉大だなんて考えられなかつた

そのとき、森の奥から物音が聞こえた

最初はこの島の動物だと思った

しかし、様子を見に行くためにその方向にいくと、安易な気持ちは一気に凍り付いた

見間違いだろうか

確かに人影が見えた

女の子だった

いや、子を付けるべきではないだろうか、俺より年上だろうから高校生ぐらいだろうか

とにかく、人がいた

俺は声をかけようと思つた その時、彼女は突然駆け出した  
驚いてすぐ追い掛けた

しかし、彼女は深い森に入つたあと、忽然と姿を消した

いつたい彼女は何だつたのだろうか

不思議に思いながら空を見上げると、もう太陽は頂点まで昇っていた  
もう昼なのか…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1251f/>

---

夏

2010年10月9日23時53分発行